



吉川英梨

『海蝶』執筆の上で、多く使った表現があります。

切り開く。

震災の傷を背負いながら女性初の潜水士の道を、主人公の忍海愛は「切り開いていく」わけですが……。

この「切り開く」。

海上保安官の気質として『正義仁愛』の次に通じるものがあるのではないかと、これまでたくさん海上保安官の方々とお会いして感じました。

私が最初に『海上保安官の人生』に触れたのは、佐藤雄二元長官の著書『波濤を越えて』でした。その後、海上保安協会の宮野直昭常務理事から聞きかじる現役時代の話、そして北岡洋志氏の『海上保安庁特殊救難隊 限りなき挑戦』も読み、この

「切り開き続けている」4人の女性海上保安官

お三方に共通する点を見つけました。

それは「自分はここで何ができるのか、何を成し遂げるのか」ということを、異動の先々で思い悩みながらも挑戦し続けている、ということでした。前任者の引き継ぎ通りでいいんじゃない、なにか成し遂げても公務員は給料同じじゃん——と私は思ってしまうのですが、このお三方はそれでは終わらない。初めのころはこのお三方がたまたま「すごい海上保安官」だったのだろう思っていたのですが、現場に行く先々でお会いする海上保安官のみなさんに同じにおいを感じます。みなさんがそれぞれになにかを「切り開いている」。特にその思いを強く感じたのが女性海上保安官の方々でした。

現在、女性海上保安官として最高位の道を「切り開き続けている」、中林久子さん。初めてお会いするとき、厳しくて怖い

川原山さん(左)、篠田さん(右)と鼎談



方なんだろうなぁと置いていたら、私という「小説家」に興味津々。「どうやって書くの」「どうやって取材するの」と少女のように目をキラキラさせて逆取材状態に(笑)。全ての女性海上保安官の先頭に立つ方、ご苦労が相当あるはずと思うのですが、ご本人はとぼけてらして、最終的には「男も女もその地位にしたら関係ないよね」とさらりと流す。その姿に惚れ惚れいたしました。

川原山由香さんは『海蝶』発売後に篠田麻里子さんとの鼎談や、『感染捜査』の取材同行、

く鋭い意見を持っている川原山さん、いち海保ファンでつい礼賛に走る私の思考に穴をあけてくれる頼もしい存在でもあります。

『感染捜査』の取材でお会いした蓮見由絵さんのお話も非常に心を打ちました。保大卒の女性海上保安官の中で初めて産休・育休を取った蓮見さんの覚悟は、『海の教場』でしっかり書かせていただいています。

最後、取材に行く先々で必ず名前を聞く超有名女性海上保安

官のあの方も、『海の教場』の取材を通じて会うことができました。海上保安庁のアンジェリーナ・ジョリー(!?)こと、松浦あずささんです。恐らく松浦さんのことを語り出すと『海蝶ノート』の残り枠を全て費やしても終わらないほど……松浦さんについては「書ききれない」。その言葉だけで充分でしょう。松浦さんは特修科を経て女性幹部の道を切り開いていった一人だろうと思います。

さてこの「切り開く」。海上保安官の気質として他の公務員の方々にはあまり感じない部分ですが、なぜ海上保安官だけ?と私はしばし疑問に思っていました。偶然そういう気概のある方が集まっている組織なのか?

そんなことってあるのかなあ。

その答えを教えてくれたのが、執筆当時、清水海上保安部部長だった田中裕二さんです。その様子はまた次回に。

(つづく)

「自分はここで何ができるのか」